

米山学友の群像 vol.2

Yoneyama Alumni in the World



「米山学友の群像 vol.2」発行に寄せて

私たちが愛情をこめて支援し、今や世界で活躍する米山学友(元米山奨学生)の情報をまとめた広報冊子『米山学友の群像』は、2005年6月に第1号が発行され、米山月間用資料として 全ロータリークラブへ配布され、大変に好評を得ました。また、関係省庁や諸団体、大学へも送付され、対外広報にも大きな役割を果たしました。第1号発行から2年を経過し、このたび第2号が発行される運びとなりました。

ロータリー米山記念奨学事業は、日本の全ロータリアンが参加する多地区合同奉仕活動であり、まさに日本のロータリーが世界に誇ることのできる奨学事業であります。これまでに日本の大学・大学院で学ぶ外国人留学生、約14,000人に奨学金を支給し、優秀な卒業生を地域社会、また世界へ送り出してまいりました。これらの元奨学生は、それぞれの母国で、また日本や世界各地で活躍され、その地域の発展や国際理解の増進に貢献しているのです。

私は、かねてより、米山奨学金への寄付は素晴らしい奨学事業の片道切符でしかないと思ってきました。すなわち、優れた奨学生の世話クラブになり、また奨学生をクラブに迎えて卓話を聞くなどの接点を設けることが、重要な帰りの切符であると思うのです。そうすることにより、われわれの奨学事業への意欲が高まるだけでなく、奨学生の日本文化への愛着が深まるものと思われます。

本年は財団設立40周年にあたります。この間に私たちは累計で109ヶ国より13,902名の学生をお世話してまいりました。特筆すべきは、その95.8%がアジア州からの人たちであることです。『米山学友の群像』は、アジアの平和から世界平和に拡大する優れた学友の雄姿をご紹介できると確信いたします。ぜひとも彼らに惜しみない拍手をお送りいただきたいと思います。

2007年9月



(財)ロータリー米山記念奨学会
理事長 板橋 敏雄

目 次

はじめに

『米山学友の群像 vol.2』発行に寄せて

1.ロータリー米山奨学事業とは	2
2.世界で活躍する米山学友	5
●学友の著書紹介	11
●叙勲・表彰の荣誉に輝いた学友たち	12
●学友短信	14
●とっておきの卓話	16
3.『米山奨学事業の宝物』傑作選	17
●言葉の力が未来を開く	18
－元駐日韓国大使からのメッセージ－	
●生徒たちがつなぐ夢の続き	20
－モンゴル初の3年制高校を創設－	
● Bangladesh の未来を支えて	22
－ロータリーの水プロジェクトとともに－	
4.世話クラブ・カウンセラー制度があればこそ	24
5.米山学友会の紹介	26
6.データで見る米山学友	28

1 ローターリー米山奨学事業とは

民間最大の奨学事業です

(財)ロータリー米山記念奨学会は、勉学、研究を志して日本に在留している外国人留学生に対し、日本全国のロータリークラブ会員の寄付金を財源として、奨学金を支給し支援する民間の奨学財団です。

1967年に財団法人として設立の許可を受け、これまでに世界109の国・地域出身の13,902人(2007年4月現在)におよぶ外国人留学生を支援し、今日では、事業規模と採用数において、民間で最大の奨学団体*となっています。

* (財)助成財団センター発表の助成等事業費上位100財団(2005年度)において、米山奨学会は年間助成額:12億4千万円で第3位、民間主導型財団では15年連続で第1位となっています。

【奨学金の種類と採用人数(2008学年度)】

ロータリー米山奨学金一覧	月額	期間	募集システム	人数
1. 学部課程(YU)	10万円	最長2年	指定校・学校 推薦制度	794人(枠)
2. 修士課程(YM)	14万円			
3. 博士課程(YD)	14万円			
4. 地区奨励	7万円	1年		
5. クラブ支援(CY)	14万円	6カ月/1年	世話クラブ推薦	
6. 現地採用	7万円 (渡航・住居費、 授業料別)	3~4年 (日本語研 修含む)	現地公募	4人
7. 海外学友会推薦	14万円 (渡航・住居費別)	1年	海外学友会推薦	2人
奨学生採用数(枠) 計				800人

上記は、2008学年度(4月1日~3月31日)の採用(予定)数です。

4.地区奨励奨学金は1人枠で2人採用できるため、実際の奨学生数は、800人を上回ります。

世界の平和を願って始まった奨学事業

米山奨学事業の歴史は、50年以上前にさかのぼります。

敗戦後の復興が続く1952年、日本のロータリーの礎を築いた米山梅吉氏の功績を記念して、東京ロータリークラブによって「米山基金」が設立されました。

日本のロータリーが国際ロータリーに復帰して3年後、米山梅吉氏が見ずして、奉仕に捧げた生涯を終えてから6年後のことです。米山梅吉氏が生前、東南アジアに深い関心をもっていたことから、ロータリー財団の国際奨学制度に模して、アジア諸国から奨学生を招致しようというのが基金設立の目的でした。そして、2年にわたる募金活動の後、1954年にタイから第1号奨学生となるソムチャード氏^{しょうへい}を招聘したのです。氏は、東京大学で養蚕学を研究し、帰国してからはタイの蚕糸局に入局、タイシルクの増産に貢献しました。

米山奨学金の創設の目的は、日本が再び戦争の過ちを繰り返さない誓いと、世界に“平和日本”の理解を促すことにありました。留学生が平和を求める日本人と出会い、互いに信頼し合う関係を築き、「世界の懸け橋」となることを願ってつくられたのです。



米山基金による
第1号奨学生ソムチャード氏
(1954年)



奨学生懇親会(1958年)

「世話クラブ・カウンセラー制度」による留学生の心のケアを重視しています

ロータリー米山奨学金制度の最大の特長は、経済的な支援だけでなく、「世話クラブ・カウンセラー制度」を設けて、奨学生の精神面のケアを図っていることです。親善・交流を通じた国際理解を推進する米山奨学事業の要であり、ロータリークラブという地域密着の組織だからこそできる重要な特性といえるでしょう。

奨学生には、大学・学校の所在するロータリー地区から1つのロータリークラブが世話クラブとして選ばれます。さらに世話クラブの会員の中から、専任のカウンセラーが1人付いて、奨学生の日常の相談に乗ったり、文化体験の案内役や交流の橋渡しに努めたりして、奨学生の日本

での生活が心豊かなものになるように配慮しています。大学の指導教員と連絡を取り合ったり、自宅に奨学生を招いて家族ぐるみで交流したりする例も多くあります。

奨学生には毎月1回世話クラブの例会に参加することが義務づけられており、奨学金もそこで手渡されます。そのほかにも、奨学生には、ロータリークラブの例会で母国のことや自分の研究について卓話（スピーチ）したり、クラブ・地区の社会奉仕活動、交流会や研修旅行に参加したりと、ロータリーの活動を通じて、日本文化や地域社会と触れ合うさまざまな機会が提供されます。

「世話クラブ・カウンセラー制度」は、国費や他の奨学金制度には無い魅力として、留学生はもとより、他団体や大学、行政機関などからも注目されています。



オリエンテーションでカウンセラーと初対面



世話クラブ会員との交流



奨学生による卓話

米山梅吉さんって、どんな人？

米山奨学事業の記念の称号を付した米山梅吉氏(1868-1946)は、幼少にして父と死別し、母の手一つで育てられました。16歳の時、静岡県長泉町から上京し、働きながら勉学に励みました。20歳で米国へ渡り、ベルモント・アカデミー(カリフォルニア州)、ウエスレアン大学(オハイオ州)、シラキユース大学(ニューヨーク州)で8年間の苦学の留学生活を送りました。

帰国後、文筆家を志して勝海舟に師事しますが、友人の薦めで三井銀行に入社し常務取締役となり、その後、三井信託株式会社を創立し取締役社長に就任しました。信託業法が制定されるといち早く信託会社を設立して、新分野を開拓し、その目的を“社会への貢献”とするなど、今日でいうフィランソピー(Philanthropy)の基盤を作りました。

晩年は財団法人三井報恩会の理事長となり、ハン

セン病・結核・癌研究の助成など多くの社会事業・医療事業に奉仕しました。また、子どもの教育のために、はる夫人と共に私財を投じて緑岡小学校(青山学院初等科の前身)を創立しました。

“何事も人々からしてほしいと望むことは人々にもその通りせよ”これは米山梅吉氏の願いでもあり、ご自身の生涯そのものでした。“他人への思いやりと助け合い”の精神を身もって行いつつ、そのことについて多くを語らなかつた陰徳の人でした。



【参考図書】

点描 米山梅吉—日本のロータリークラブと信託業の創始者(新風舎文庫)
著者:谷内 宏文
発行:新風舎(2005年8月)
価格:890円(税込)

ロータリーとは

ロータリーの誕生とその成長

20世紀初頭のシカゴの街は、著しい社会経済の発展の陰で、商業道德の欠如が目につくようになっていました。

ちょうどそのころ、ここに事務所を構えていた青年弁護士ポール・ハリスはこの風潮に堪えかね、友人3人と語らって、お互いに信頼のできる公正な取引をし、仕事上の付き合いがそのまま親友関係にまで発展するような仲間を増やしたい、という趣旨でロータリークラブという会合を考えました。ロータリーとは集会を各自の事務所持ち回りで順番に開くことから名付けられたものです。

こうして1905年2月23日にシカゴロータリークラブが誕生しました。

それからは、志を同じくするクラブが、つぎつぎ各地に生まれて、国境を超え、今では200以上の国と地域に広がり、クラブ数32,747、会員総数1,221,298人(2007年5月31日国際ロータリー公式発表)に達しています。

そして、これら世界中のクラブの連合体を国際ロータリーと称します。

このように、歴史的に見ても、ロータリーとは職業倫理を重んずる実業人、専門職業人の集まりなのです。その組織が地球の隅々にまで拡大するにつれて、ロータリーは世界に眼を開いて、幅広い奉仕活動を求められるようになり、現在は多方面にわたって多大の貢献をしています。

日本のロータリー

わが国最初のロータリークラブは、1920(大正9)年10月20日に創立された東京ロータリークラブで、翌1921年4月1日に、世界で855番目のクラブとして、国際ロータリーに加盟が承認されました。

日本でのロータリークラブ設立については、ポール・ハリスの片腕としてロータリーの組織をつくり、海外拡大に情熱的に取り組んだ初代事務総長チェスリー・ペリーと、創立の準備に奔走した米山梅吉、福島喜三次などの先達の功を忘れることができません。

その後、日本のロータリーは、第2次世界大戦の波に洗われて、1940年に国際ロータリーから脱退します。戦後1949年3月になって、再び復帰加盟しますが、この時、復帰に尽力してくれたのが国際ロータリーの第3代事務総長ジョージ・ミンズでした。

その後の日本におけるロータリーの拡大発展は目覚ましいものがあります。ロータリー財団への貢献も抜群で、今や国際ロータリーにおける日本の地位は不動のものになりました。現在、日本全体でのクラブ数は2,325、会員数99,837人(2007年5月末現在)となっています。

出典:『ロータリーの友』(※)2007年8月号より

※『ロータリーの友』は、日本のロータリー会員向けに毎月発行されているロータリー地域雑誌です。



ロータリーの創始者ポール・ハリス(1868-1947)



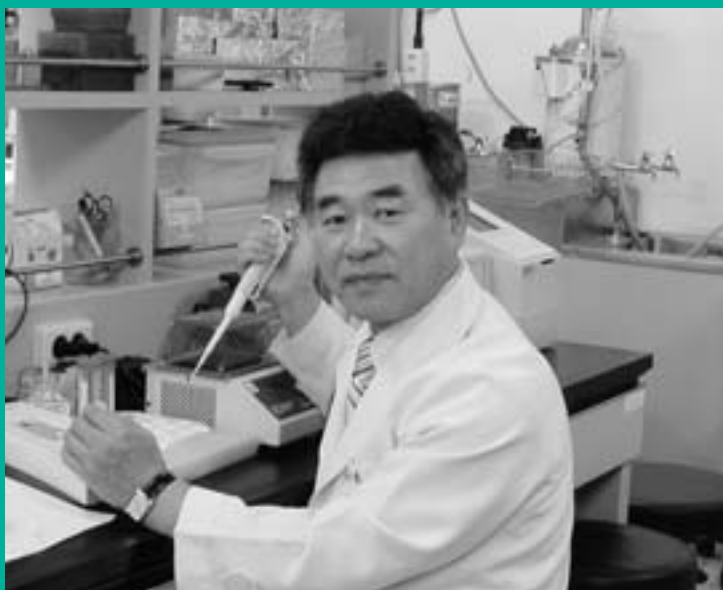
1935年、来日したポール・ハリス(前列左から3番目)を囲む米山梅吉(左隣)ら日本のロータリアン



日本ロータリーの父 米山梅吉(1868-1946)

2 世界で活躍する米山学友

ロータリー米山記念奨学会では、「世話クラブ・カウンセラー制度」に代表される心の通った奨学事業を実現し、これまでに1万3千人を超える優秀な学友を世に送り出してきました。ロータリー精神に触れ、心をはぐくんだ米山学友は、いま母国で、日本で、世界で活躍しています。



A PECに採用された薬酒の開発者。研究と社会福祉事業に身を投じた20年



鄭 永基 (チョン・ヨンキ) 氏

(韓国／1985-88／広島大学大学院／西条RC)

東亜大学校教授／ハンマウム福祉会理事長／(株)千年約束理事・(株)千年約束バイオ研究所所長

鄭さんが開発した「千年約束」は、韓国が誇る薬酒として、2005年に韓国・釜山で開催されたAPEC首脳会議の公式乾杯酒に選ばれた。日本留学中、知的障害のある長女への東広島市民の温かい支援に感銘を受け、1988年に学位を取得して帰国後、私財を投じて「ハンマウム福祉会」を設立。現在、「社会福祉法人ハンマウム学園」では、知的障害をもった子どもたち50人以上が笑顔で生活している。

『娘を愛してくださった土肥浩右バスターガバナーをはじめ皆さまの愛情が、私の人生に大きな影響を与えました。米山梅吉先生のように、他人に奉仕する気持ちで愛をもって生きることこそが、日本でお世話になった人への恩返しになると信じます』 (鄭 永基)

日本の高齢者福祉策を韓国にいち早く導入。子どもたちの国際親善にも尽力



金 玄勲 (キム・ヒョンフン) 氏

(韓国／1996-97／日本社会事業大学大学院／大宮南西RC)

社会福祉法人幸福創造 理事長

韓国に帰国後、在宅サービスセンターを立ち上げ、ホームヘルパー派遣事業から、認知症高齢者のためのデイサービス、短期保護、高齢者虐待予防事業などに拡大。老人ホーム、保育所のほかに、2006年からは家庭内暴力に苦しむ女性の保護施設の運営もスタートした。地域の社会福祉に真摯に取り組むほか、Kid's AU(こどもたちのアジア連合)韓国代表として、毎年、日本を含めた北東アジア6カ国の子どものキャンプも行っている。

『米山奨学金をいただいたことに、とても誇りをもっています。ロータリーの支えがあって、一人の青年の夢がかなったと思います。日本でまいてくださった種が世界のどこかで人類の平和と繁栄のために、また日本とそれぞれの国との懸け橋の役割を果たしていることを信じています。私も微力ながらがんばっていきたいと思います』 (金 玄勲)

台湾の刑務所改革に“奇跡”を起こした監獄長



吳 憲璋 (ウー・シェンツァン) 氏

(台湾／1986-87／明治大学大学院／東京原宿RC)

台湾彰化刑務所 所長

台南刑務所保安課長を務めていた1985年、社会で激増する犯罪を憂い、新しい矯正教育や心理療法を学ぶために、日本留学を決意。明治大学大学院のゼミでは、授業の一環として、日本各地の刑務所や少年院を巡った。長野少年鑑別所での参観に大きな影響を受け、帰国後、芸術活動を取り入れた受刑者への心理療法に取り組む。それを元に行った刑務所改革は“奇跡”と呼ばれ、その後、多くの矯正施設にこの心理療法が導入されている。

『米山奨学金を受けた私たちは、ただ与えられるだけでなく、受けたものを伝えていかなければなりません。人間として最高の幸せは、使命と思える仕事をもつこと。私は、あきらめることなく、犯罪者の更正に人生を賭けて取り組みたいと思います』 (吳 憲璋)

女性初の故宮博物院院長に就任



林 曼麗 (リン・マンレイ) 氏

(台湾／1981-83／東京大学大学院, 1996／東京芸術大学／東京保谷RC)
国立故宮博物院(台北) 院長

東京大学で教育学博士号を取得後、台湾に帰国。台北市立美術館館長などを経て、2004年5月より、世界四大博物館に数えられる国立故宮博物院の副院長に就任。以降、さまざまな経営手段を用いて、故宮博物院に対する固定観念をくつがえす斬新な改革を行った。2006年1月、女性として初めて、閣僚級とされる国立故宮博物院の院長に就任。2007年2月、全面改装工事を終えて、全館リニューアルオープンした故宮博物院に対する世界の注目は熱く、知日派で知られる林院長とともに、日本のマスコミにもこぞって取り上げられた。

『1981-83年の2年間および1996年の3ヶ月間、ロータリーの皆様にいろいろお世話になりまして、本当に感謝しております。月ごとに参った例会ではたくさんのロータリアンとの交流ができて、素晴らしい思い出がいっぱいでした。財団設立40周年に心からお祝い申し上げます。一層のご発展とご躍進をご期待申し上げます』
(林 曼麗)

台湾・香港で名高い村上春樹作品の翻訳家



頼 明珠 (ライ・ミンチュ) 氏

(台湾／1977-78／千葉大学大学院／松戸RC) 翻訳家

広告会社でコピーライターとして勤めて、1975年に日本に留学。千葉大学大学院修士課程で農学を専攻した。帰国後、コピーライターとして復職したが、翻訳の面白さに目覚め、台湾でも人気のある村上春樹の著作を30冊以上翻訳している。2006年3月には、各国の村上春樹作品翻訳者を招いて東京で開かれた国際シンポジウム「春樹をめぐる冒険」(国際交流基金主催)にもパネリストとして参加。中国語圏を代表する村上作品の翻訳家として、台湾・香港で名声を博している。

『今思えば、日本に留学したことは、私の生涯で最もラッキーな転機でした。私にできるせめてもの恩返しとして、多くのすばらしい日本の文学作品を翻訳し、台湾はじめ中国語圏の読者たちに紹介することで、日本留学で親切にしてくださった方々に感謝の気持ちを捧げたいと思っています』
(頼 明珠)

「第2の肝臓がん」エキノコックス症の解明に挑む



肖 寧 (シャオ・ニン) 氏

(中国／2005-06／旭川医科大学大学院／松戸RC)
四川省疾病対策センター寄生虫病研究所 副所長

中国では「第2の肝臓がん」と恐れられる寄生虫病、エキノコックス症の解明のために、この分野で世界をリードする旭川医科大学に留学。その間に新種のエキノコックスを発見し、学会に衝撃を与えた。米山奨学生としても数々の交流活動に貢献。中国に帰国後も寄生虫病研究所の副所長として、地球規模で流行が拡大するエキノコックス症を撲滅するために、国際的な共同調査や日本の研究者たちとの共同研究に参加している。

『研究一筋の毎日で、日本文化や日本人に深くかかわる機会がなかった私は、ロータリーとの交流で、日本人への見方が本当に変わりました。日本人は厳格で頑固、そういう印象でした。でも実際は、勤勉で温かく、ユーモアにあふれ、平和のために奉仕活動もしているので、私自身も社会参加、社会貢献の意識が強くなりました』
(肖 寧)

心を癒す音楽療法と平和への祈りを実践する二胡奏者



姜 晓艳 (ジャン・ショウイエン) 氏
(中国/2000-02/広島大学大学院/広島西南RC)
二胡音楽院 院長・医学博士

5歳から芸術学校で二胡を中心に弦楽器や歌・踊りなどを習う。1997年広島大学医学部の客員研究員として来日。以降、「いのちの尊さと平和の願い」などをテーマに、日本全国やアメリカで医学講演と二胡演奏で幅広く活躍している。広島代表として、広島原爆記念日にニューヨークの平和記念式典で生演奏するなど、「ひろしま国際交流推進者・推進団体」の認定も受けて多彩に活動中。また、ストレス社会への音楽療法と、精神障害者・原爆被害者支援活動にも力を注いでいる。

『米山奨学金をいただき、研究に集中できて医学博士の学位を取得できたことに感謝しております。ロータリーの社会奉仕、国際奉仕、職業奉仕の精神に感動しました。日本への感謝の気持ちと平和への願いを込めて、これからも精進を重ね、二胡の音色を通じて、皆さんの優しい心を世界の人々に伝えていきたいと思います』
(姜 晓艳)

「ネパールの梅吉になりたい」母国の子どもたちのための教育基金を創設



ギリ・ラム氏
(ネパール/1998-2000/室蘭工業大学大学院/室蘭RC)
(株)三井物産戦略研究所 新事業開発部所属 北海道マルディコラ・ネパール教育基金 日本代表
ネパールの山村マルディコラで生まれ育ち、苦学の末に、日本のODA(政府開発援助)プロジェクトを経て、最先端の電気電子工学を学ぶために来日。大学2年のときに、子どもの教育に私財を投じた米山梅吉氏の生き方に感銘を受けて、母国ネパールの教育向上を目指した「北海道マルディコラ・ネパール教育基金」を設立。講演活動で支援を広げて、母国の貧しい子どもたちに奨学金を送る活動を続けている。

『お金をもらうだけなら、月額の高い国費奨学金の方がいい。でも、何かを成し遂げようと思う人には、ロータリーの皆さんと協力して喜びを分かち合い、夢を実現できる米山奨学金の方がずっと価値があります』
(ギリ・ラム)

津波による孤児のための里親プロジェクトなど多くの支援活動を展開



ピーター・フェルナンドプレ氏
(スリランカ/1997-98/九州大学大学院/福岡RC)
(株)やずや 経営企画課所属 福岡スリランカ友の会会長/西日本スリランカ奨学金協会代表
在学中にスリランカと日本との親交を深めるさまざまな活動を行い、新聞でその活動を知った福岡RCに卓話に呼ばれたのを機に、福岡RCのWCS(世界社会奉仕)事業によって「西日本スリランカ奨学金協会」を設立。スリランカ学生に奨学金を送る活動をスタートした。また、2004年12月に起きた大津波で親を失った子どものために、里親プロジェクトも立ち上げて、母国への支援を続けている。

『将来は母国で会社を設立し、多くの若者に職場を提供すると同時に、日本で学んだ技術を生かして食品の研究を進め、新商品をつくりたい。そしていつか必ず、米山学友と一緒に、“米山JAPANロータリークラブ”を立ち上げます』
(ピーター・フェルナンドプレ)

地雷の脅威と戦う母国アフガニスタンを支援。愛と平和の尊さを伝える語り部



アハマト・ジャン氏

(アフガニスタン／2001-02／北海道大学大学院／札幌はまなすRC)
北海航測(株)地理情報部 情報システムチーム所属

国費留学生として旧チェコスロバキアで電子工学を学び、修士号を取得。1989年に帰国後は地雷除去を行うNGO活動に身を投じたが、内戦の激化を受けて、日本に留学した。北海道大学大学院在学中から、母国の惨状を知ってもらいたいと地元の小中学校などで講演活動をし、日本の子どもたちに自らの戦争体験とともに平和の尊さを伝えることに尽力。講演で得た謝礼や寄付は、すべて母国の子どもたちのために使い、地雷で足を失った人へ車いすを送る活動や地雷回避のための教科書づくりにも参加している。

『人類史上、今こそ最も愛が必要とされているのではないのでしょうか。世界へ永遠の平和と愛を、そして苦しんでいるすべての子どもに手を差し伸べたい。ただ援助をするだけではなく、支援金や物資によって彼らが自立し、自分たちの手で明るい未来を築くことができるよう手助けしたいと思っています』
(アハマト・ジャン)

ミャンマーで2人目の脳神経外科医として母国での診療に身を捧げる



アウン・チョウ氏

(ミャンマー／1962-66／東京大学大学院／東京北RC・東京南RC)
Myanmar Academy of Medical Science事務総長、ミャンマー元日本留学生協会(MAJA)会長

1966年に東京大学で医学博士号を取得し、翌年帰国。ミャンマーで2人目の脳神経外科医として、ランゲーン総合病院(現ヤンゴン総合病院)で長年診療にあたる。その間、政府派遣留学でイギリス、フランスに赴いたほか、JICA(国際協力機構)のプログラムで2回にわたり、長期研修のため来日した。退職後は、Myanmar Academy of Medical Scienceの事務総長に就任、マラリア・結核・HIVの感染抑止についての政策提言などを行うほか、日本政府の国費留学生の面接官やミャンマー元日本留学生協会の会長など、日本留学に関わる要職も務めている。

『米山奨学金には4年間大変お世話になりました。奨学金のおかげで、物価の高い日本でも研究に専念できて本当に助かりました。世話クラブの東京北RCでのクリスマス例会に参加して、とても楽しかったことも良き思い出です。私たちの時代にはなかったカウンセラー制度も、留学生のためにとっても良い制度だと思います』
(アウン・チョウ)

ベトナムの高等教育発展に寄与し、現地採用米山奨学金の試行にも協力



フイン・ムイ氏

(ベトナム／1973-74／東京大学大学院／東京荏原RC)
タンロン技術学院 院長

東京大学で理学博士号を取得した数学者。1988年、ベトナム初の私立大学となるタンロン大学を首都ハノイに設立し、学長に就任した。現在は、タンロン技術学院の院長として、日本語教育やIT・CAD技術者養成を通じ、ベトナム人学生の新たな職業機会をサポート。また、日本企業とのビジネスを展開し、越日ビジネス交流に幅広く貢献している。2006年からベトナムで試行中の現地採用米山奨学金プログラムでは、現地の教育事情に精通する協力者として、書類選考や面接などの選考業務に携わっている。

子どもたちがアジアと出会う“場”を創設



千代鳥 (チョウドリ) モーミン・ウッディン氏

(Bangladesh / 1976-78 / 東京都立大学 (現・首都大学東京) / 東京城東RC)
(株) チョウドリ・ソフトウェア・サービス 代表取締役 NPO法人「ちきゅう市民クラブ」会長
学位取得後、化学工学エンジニア、コンサルタントを経て、1996年に石油精製・石油化学・バイオエンジニアリングのソフトウェア販売会社を設立。海外企業と提携し、大手石油化学会社・エンジニアリング会社・製薬会社・大学などをクライアントにもち、ビジネスに手腕を発揮している。NPO法人「ちきゅう市民クラブ」の会長としても活躍。文化施設をはじめ、小中学校に留学生や元留学生を講師として派遣しているほか、さまざまな独自の国際交流イベントを行っている。

『日本の子どもたちにアジアや中東の文化を身近に感じてもらいたい。その子たちの中から外交官になる者が現れば、アジアの理解がより進むでしょう。米山奨学生の時、世話クラブと交流できたのがとても良かった。ロータリーの奉仕の精神に触れたことは、少なからず現在の活動にも影響を与えたと思います』
千代鳥モーミン・ウッディン

技術者として、経営者として、世の中の生活の質を高める技術の普及を図る



ウィリアム・リー氏

(Malaysia / 1995-97 / 東京大学大学院 / 横浜田園RC)
eMembrane, Inc. (イーメンブレン・インク) 社長兼CEO

東京大学で博士号取得後、ハーバード大学研究員、投資会社を経て、2000年に米国ボストンにて起業。新薬の開発プロセスの効率を高めるツールの研究開発と商品化に取り組んでいる。その技術は、2004年に行われた第4回ビジネスプランコンテスト・イン・ジャパン (日本MITエンタープライズフォーラム主催) で最優秀賞を獲得するなど、高い評価を得ており、早ければ2008年夏にも米国・日本で製品化される予定。「その時代に役立つ技術を提供するのが使命」と、技術者として、また経営者として、夢の実現を目指している。

『今までずっと自分の「夢」のために頑張ってきました。「夢」があるから、これからもどんな苦勞も耐えていきます。ロータリー米山奨学金が私の「夢」を一時支えてくれたことに、ここでもう一度御礼申し上げます。また、今でも私の「夢」を信じていただいている当時のカウンセラー、大澤亀久男さんに心より感謝しております』
(ウィリアム・リー)

メキシコの大学の副学長に。土曜日は「日本デー」を実践する親日家



ヘラルド・アヤラさん

(Mexico / 1995-96 / 徳島大学大学院 / 徳島RC)
Universidad de Las Americas, Puebla 教授

1996年に徳島大学で工学博士号を取得し、メキシコに帰国。日本留学前から勤務していたLas Americas大学に復職し、情報工学研究センター所長に就任した。2002年には、同大学の研究・大学院教育部門の学部長、2005年には同部門の副学長に就任。毎週土曜日を「日本デー」として、自宅に設けた和室で書道や日本の音楽に親しむなど、第2の故郷である日本とのつながりを保ちつづける親日家。2007年に長期研究休暇 (サバティカル) を利用して、徳島大学での研究を再開する。

『10年間大学で管理職務にあったこともあり、2007年は1年間のサバティカルを取ることにしました。そのうちの6ヶ月間は徳島大学で、日本の共同研究者とともに、研究の続きを始める予定です。日本でお世話になったロータリアンの皆さんとも再会できるのがとても楽しみです』 (ヘラルド・アヤラ)

学友の著書紹介

米山学友の皆さんが最近発行した著作をご紹介します。



日韓の真の相互理解を目指して、この世に送り出された名著!

『反日ナショナリズムを超えて — 韓国人の反日感情を読み解く —』

河出書房新社 / 2005年8月発行

『和解のために 教科書・慰安婦・靖国・独島』

平凡社 / 2006年11月発行

朴 裕河 (パク ユハ) 著

(韓国 / 1987-88 / 早稲田大学大学院 / 浦和北RC)

朴さんは、世宗大学校日本文学科教授。2004年の日韓文化交流基金賞を受賞するなど、“知日派”として知られています。『反日ナショナリズムを超えて』で、朴さんは、自国・韓国のナショナリズムの根底にあるものを冷静かつ丁寧に分析。近著『和解のために 教科書・慰安婦・靖国・独島』では、日韓関係で最も困難な諸問題に向き合い、ナショナリズムを超えて、和解の道を提示しようとしています。両書ともに、韓国人に向けて書かれ、韓国でまず発行されました。日韓間に真の相互理解を希求する朴さんの強い信念とその勇氣に感銘を受けることでしょう。

韓国で「優秀環境図書」に選ばれた話題作!

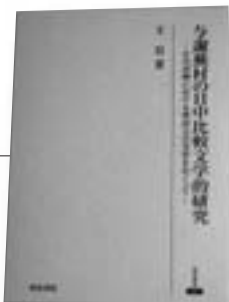
『ごみから見える世の中 — 資源再活用の虚と実 —』

韓国 / 2006年6月発行

劉 庭秀 (ユ ジョンス) 著

(韓国 / 1998-99 / 筑波大学大学院 / 下妻RC)

現在、東北大学大学院准教授である劉さんが、自身の廃棄物リサイクル研究を、日本、フランス、ドイツ、アメリカ、韓国の事例を中心に学際的な視点で整理分析したものです。韓国「三星経済研究所」の出版企画公募に選ばれ、2006年6月に出版されるや、同年9月には「韓国刊行物倫理委員会」によって『青少年勸奨図書』に、さらに同年12月には、韓国環境省の『優秀環境図書』に選ばれ、韓国環境大臣より表彰されるなど、注目を集めています。日本でも出版される予定です。



『与謝蕪村の日中比較文学的研究 —その詩画における漢詩文の受容をめぐって—』

和泉書院 / 2006年3月発行

日本学術振興会助成図書

王 岩 (ワン イエン) 著

(中国 / 1994-96 / 愛知学院大学大学院 / 岡崎城南RC)

王さんは、米山奨学期間終了後、名古屋大学大学院の博士課程に進み、2001年に文学博士号を取得しました。同書は、「中国人の視点から、蕪村詩画と漢詩文との影響関係を実証的に論証し、新しい出典を幾つか明らかにして、蕪村芸術の新たな読みを提示した」(和泉書房新刊案内内)という意欲作。王さんはさらに漢詩と俳句に関する論考をまとめています。

『中華圏の高齢者福祉と介護 — 中国・香港・台湾 —』

MINERVA社会福祉叢書 / 2007年6月発行

沈 潔 編著

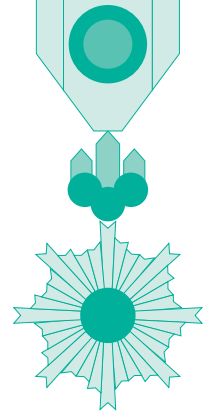
台湾部分執筆: 徐 明仿

(台湾 / 2004-06 / 高知女子大学大学院 / 高知北RC)

2006年に博士課程を修了した徐さんは、青森・八戸工業大学の教員として就職。「高知でロータリークラブの皆さんに出会えたことは、自分にとって大きな宝」と語る徐さんは、現在もお世話になった高知のロータリアンに近況を連絡し、初めての著書となる本書も寄贈されたとか。同書は「少子高齢化」をキーワードに、中国本土・香港・台湾の高齢者福祉政策を考察する内容で、徐さんが執筆したのは、第Ⅲ部の台湾編(第9~12章)です。

叙勲・表彰の榮譽に輝いた学友たち

～栄えある受章・受賞おめでとうございます～



平成18年春の外国人叙勲にて「旭日中綬章」受章

李 賢起さん

(韓国／1970-72／東京教育大学(現・筑波大学)大学院／東京世田谷RC)



日本の古典文学や日本語教育の研究に多大な業績を残したほか、日本の大学などで、日韓の学术交流を幅広く推進。NHKハングル講座やKBSテレビの日本語講座の講師を務めるなど、両国語の普及にも貢献しました。韓国では、日本語教育の先駆者として教科書を出版したり、韓国政府に対する日本語教育の審議及び諮問活動を行うなど、日韓両国の文化理解に大きな役割を果たしています。2005年日本文化交流基金賞を受賞。

『今回の身に余る榮譽は、在韓日本大使館をはじめ日本の皆様から、ご指導とご協力をいただいた結果です。改めて感謝を申し上げます。この叙勲が、私個人の喜びと光栄にとどまらず、韓日両国の学術文化交流、相互理解と親善のために努力しておられる方々への激励に繋がることを切に希望いたします』

平成18年秋の外国人叙勲にて「旭日中綬章」受章

金 榮作(キム ヨンジャク)さん

(韓国／1968-71／東京大学大学院／東京葛飾RC・東京神田RC)



ソウル大学卒業後、東京大学大学院で国際政治学を学び、修士・博士の学位を取得。国際基督教大学助教授、東京大学客員教授を経て、韓国の国民大学に勤務。第12代国会議員。現在は、国民大学名誉教授、現代日本学会長の任にあります。今回の受章は、2005年の日韓友情年において国交正常化40周年記念国際学術会議を成功させるなど、日本研究の振興および日韓の相互理解の増進に寄与した功績によるものです。

『ロータリーの皆さま、私は日本へ留学した若き日の、試練の日々を思い出すたびに、それを乗り越える上で大きな支えとなった皆さまのご恩に、本当にありがたい気持ちでいっぱいになります。早いもので、あれからもう40年近い歳月が過ぎました。その間、私個人の身上にも、また日本と韓国の間にも様々な変化がありましたが、両国の間に友好・親善関係がますます深められつつあることを大変嬉しく思います。このたび、旭日中綬章の光栄を皆さまと分かち、感謝の気持ちをお伝えすると共に、また新たな心持ちで日韓両国の友好・協力で、北東アジアの平和と繁栄のために微力を注ぎたいと思います。どうも有難うございました』

平成15年秋の外国人叙勲にて「旭日中綬章」受章

チャンドラシリ・フェルナンドさん

(スリランカ/1982-84/東北大学大学院/仙台西RC)

警察庁長官在任当時、日本・スリランカ間の警察協力推進に寄与したほか、コロンボ市の治安が悪化した際に在留邦人の保護に尽力した功績により受章。

2006年に警察庁を定年退職し、現在はスリランカ大統領の懇請を受けて、安全保障担当の大統領アドバイザーを務めています。そのほか、スリランカ日本帰国留学生の会(JAGAAS)会長、スリランカ医療・司法人協会会長などを務めています。



平成18年春の外国人叙勲にて「旭日小綬章」受章

ベアトリス・パーディニナス・モヒカさん

(フィリピン/1980-81/筑波大学大学院/竜ヶ崎RC)



フィリピンにおける日本語教育の先駆者として知られ、30年以上にわたって多大な功績を残しました。日本語センター財団校長・フィリピン日本語文化学院校長として、幅広い層の日本語学習者のニーズを満たすカリキュラムを開発。また、フィリピンの日本語教師の能力向上にも熱心に取り組み、教員対象の奨学金プログラムや交換プログラムを立ち上げたほか、フィリピン人日本語教師会の創設にも指導的役割を果たしました。

『大変光栄に思っております。ロータリークラブの皆さまをはじめ、日本の方々のご支援により学び、帰国してから日本語教師になりました。楽しく仕事をさせていただいたうえに勲章まで頂戴し、恐縮しております。これからも皆様のご指導・ご協力のもと、フィリピンにおける日本語教育の発展向上のために頑張るつもりです』

平成19年度科学技術分野の文部科学大臣表彰「若手科学者賞」受賞

金 惠淑(キム ヘスク)さん

(韓国/1993-95/岡山大学大学院/備前RC)



岡山大学大学院准教授として抗マラリア薬の開発研究に励む中、韓国人として初めて「若手科学者賞」*を受賞。受賞理由となった金さんが新たに開発した抗マラリア化合物は、既存の治療薬に耐性を示すマラリアに対しても効果があり、大量かつ安価に合成できるため、発展途上国に供給できる可能性が高いものとして期待されています。

* 萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績をあげた40歳未満の若手研究者を対象とするもの

『今回の受賞にあたり、その基礎を築いてくださったのは、ロータリアンの皆さまによるご支援のおかげです。本当にありがとうございます。米山奨学生になったばかりの頃は、毎月の例会出席に戸惑いもありましたが、いつの間にかその雰囲気を楽しんでいる自分がありました。現在、大学で学生を教えたり、研究指導をしたり、また、学会や研究費獲得のために自分を表現できるようになったのは、米山奨学生として経験したいろいろなことが凝縮された結果だと思います。熱帯病の根絶のためには国際貢献・国際奉仕の精神が何より大切です。米山奨学生として身に付けたこの精神をマラリアで苦しむ人々の役に立てるよう、微力ながら実践していきたいと思っております』

ロータリー米山記念奨学会では、誕生日を迎える米山学友の皆さんに、お祝いのEメールをお送りしています。世界中から届く返信には、学友の皆さんの近況報告と感謝の気持ちがつつられています。その一部をご紹介します。

韓国 より

李 惺(イ ソンス)

(韓国/1990-91/大阪府立大学大学院/岸和田東RC)
『1991年に大阪府立大学機械工学科で博士を取りまして、現在は韓国の建国大学機械設計学科の教授として勤めています。国に戻ってから剣道を始めて、現在は剣道4段です。2007年8月には剣道交流のため、韓国の大学の先生たちと一緒に日本を訪問する予定です』

朴 相権(パク サンクオン)

(韓国/1999-2000/千葉大学大学院/袖ヶ浦RC)
『千葉大学で2003年3月に博士号(学術/交通社会学)を取りました。2004年8月から韓国の交通安全公団に就職し、交通安全研究院に専任研究員として勤務しています。現在は、韓国國務調整室に派遣されて仕事をしております』

柳 芝英(リュウ チヨン)

(韓国/2002-04/横浜国立大学大学院/神奈川西RC)
『おかげさまで韓国の春川教育大学校美術教育学科の助教授として元気に勤務しております。ロータリーの皆さまのおかげで日本での良い思い出に恵まれました。いつも感謝しております』

台湾 より

高 淑玲(ガオ スーリン)

(台湾/1985-87/岡山大学大学院/岡山南RC)
『おかげさまで、私は台北の景文技術学院応用日本語学科に勤めております。時々、台北の米山学友会に出席しています。米山奨学生はきっといろいろな形でそれぞれの社会に貢献していると思います』

林 蕙美(リン エミ)

(台湾/2002-03/梅光学院大学大学院/下関西RC)
『米山奨学金のおかげで勉強に専念することができて、カウンセラーの福田さんはじめ、下関西RCの皆さまの温かい応援で博士号を取ることができました。台湾に帰国してから就職も順調に決まり、今、高雄第一科技大学応用日本語学科で日本語を教えています』

中国 より

王 羽梅(ワン ユーメイ)

(中国/1999-2001/名城大学大学院/一宮RC)
『帰国後、広東省の韶関市にある韶関学院(大学)に勤めています。2007年3月、同学院の副院長に就任しました。米山奨学金のおかげで順調に博士の学位が取得でき、日本の皆さまへのご恩はいつまでも忘れられません。現在、日本の友人とともに学院内に桜公園をつくらうと計画しています。これも中日友好の一環として記念になると思っております』

宋 仁徳(ソウ ジントク)

(中国/2002-03/宮崎大学大学院/西都RC)
『2004年4月に留学生生活を終え、中国チベット自治州畜牧獣医センターで、ヤクの生産利用についての研究・普及を中心に仕事を始めました。同年11月から日本学術振興会の招へいを受け、宮崎大学の先生方と共同でチベット高原生態環境保護・回復のために、「放牧ヤクの持続的資産システムモデルに関する研究」をテーマに楽しく精一杯がんばっています』

高 在栄(ガオ ツァンレン)

(中国/1998-99/新潟大学大学院/新潟西RC)
『私は今、中国国土資源部直轄の中国地質環境監測院・地下水資源環境調査監測室の室長を務めております。首都師範大学の非常勤教授もしています。日本留学中は本当にいろいろお世話になりました。中国に帰ってから中日共同研究や交流などを続けております』

マレーシア より

鄧 奇偉(テン キーウイ)

(台湾/2003-04/神奈川大学大学院/横浜戸塚中央RC)
『ペナン州にあるドイツ系のステアリング会社で、アジア・太平洋地域の設計開発担当として勤めています。大学院で専攻した自動制御と流体力学を生かせたので、この分野を選んでよかったですと思います。2006年9月に、友人との合資で日本語学校をつくりました。日本留学を希望する学生に、留学の情報や日本と日本人についての正確な情報を伝えたいと思っています』

ベトナム より

ドー・ヴァン・ユン

(ベトナム/1978-79/明治大学大学院/東京品川RC)
『8年前ベトナムに帰国し、太平洋環境株式会社(COCOMO社)を設立しました。約20年間の日本・ベトナム間の貿易経験を生かして、日本からの投資・輸出入のコンサルタント、日本ODA各種プロジェクトのコンサルタントなどをしております。地味な活動ですが、最近はベトナム政府の評価も得て、新聞の記事などにも取り上げられるようになりました』

インドネシア より

アナック・アグン、バグス・マハワン

(インドネシア/1996-97/長岡技術科学大学/長岡西RC)
『4年ほど東京でシステムエンジニアとして勤めたあと、2003年12月にインドネシアに帰国しました。現在は、ソフトウェア開発のIT企業を立ち上げ、自営しております。会社を立ち上げて2年目なので、まだまだ大変なところがたくさんありますが、何とかがんばっております』

スリランカ より

P.H.P.デシルワ

(スリランカ/1981-84/上智大学大学院/東京西北RC)
『いすゞ自動車を退職後、スリランカに戻り、現在は地方政府・州議会省および労働省の大臣アドバイザーをしております。現在の仕事では、日本での勉強が大変役に立っております。貴奨学会には長くお世話になり、誠にありがとうございました。あらためて御礼申し上げます』

フィリピン より

アナベル・オペラリオ・ダシラオ

(フィリピン/2003-05/高知大学大学院/香長RC)
『現在、母国の大学(Southern Philippines Agribusiness and Marine and Aquatic School of Technology)の農学部で教えています。ロータリー米山奨学金のおかげで学業を無事に終えることができました。地元のロータリークラブから入会を勧められており、近々入会しようと考えています。心から本当にありがとうございます!』

タイ より

パイラヤ・チャーエイサイ(旧姓クーシヴィライ)

(タイ/1999-2001/長岡技術科学大学/長岡東RC)
『2006年3月からタイのコーンケン大学の講師として勤務を始めました。タイと日本との共同研究も行っています。日本から戻って数年経ちますので、日本語が下手になってしまった気がします』

ウガンダ より

スチュアート・マクブヤ・センパラ

(ウガンダ/2001-02/アジア学院/鹿沼RC)
『私は現在、母国ウガンダで孤児の子どもたちの待遇改善のために全力を尽くしています。この仕事ができるのも、栃木県のアジア学院で得た知識のおかげ、そして、その上級課程の1年間、ロータリー米山記念奨学会から奨学金を頂けたおかげです。ご支援、本当にありがとうございました』

とっておきの卓話

ロータリークラブの例会では、米山奨学生や米山学友が卓話をするのがよくあります。卓話の内容は、母国について、また、研究テーマや将来の夢について発表することが多いようです。世話クラブだけでなく、近隣のクラブにも出かけて卓話を行うこともあります。卓話は、米山奨学生・学友とロータリアンを結ぶ大切な交流の機会となっています。ここでは、ロータリアンが感動した米山奨学生による“とっておきの卓話”を一つご紹介しましょう。

トルコがなぜ親日的か — 奨学生の卓話から —

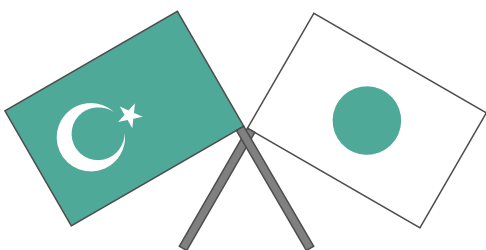
コッチ・ムスタファさん（トルコ／2006-08／鈴鹿国際大学／鈴鹿ベイRC）

トルコに親日家が多い理由はいくつかありますが、その中でトルコと日本とを結びつけた、ある歴史的な出来事をご紹介します。

1890年（明治23年）、明治天皇への使節団として訪れていたトルコ軍艦、エルトゥール号が、帰途、和歌山県沖で嵐に遭い沈没しました。587人が死亡する大惨事でした。岸に流れ着いた血だらけの乗組員たちを、大島村（現在の串本町）の村人は総出で救助し、69人が助けられました。大島村は貧しく、毎日の食事さえやっただったにもかかわらず、非常用の鶏さえずりもつぶし、傷ついたトルコ人にふるまい、懸命に介護したのです。この話は日本中に伝えられ、全国から義援金が寄せられたそうです。生存者たちは日本の軍艦で母国へ送り届けられました。

私たちトルコ人は受けた恩を忘れることはありません。1985年、イラン・イラク戦争で、イラクのフセイン大統領が「イラン上空を飛ぶすべての飛行機を打ち落とす」という声明を出し、首都テヘランに残っていた300人ほどの日本人が、脱出のために空港へ向かいました。しかし、各国の航空会社は自国民を優先したため日本人は搭乗便を確保できず、約200人が取り残されました。脱出までのリミットが迫るなか、トルコ政府が日本人救出のための特別機を派遣することを申し出ました。危険な戦場への飛行にも関わらず、多くの乗務員が名乗り出たそうです。彼らは日本人から受けた恩を返すために、日本人を優先してイラン脱出の手助けをしました。イラクからの攻撃までわずか数時間の出来事でした。

私は、母国とこのようなつながりを持った国で勉強できることを嬉しく思っています。トルコを外から見て、改めて見えてきた部分も多々あります。これからさらにいろいろな角度から物の見方、考え方を学び、将来は母国で外交官になり、トルコ周辺の国々はもちろん、世界から戦争をなくす方法を探したいと思います。



『米山奨学事業の宝物』傑作選

活躍する米山学友の姿——それは、まぎれもなく米山奨学事業の成果であり、宝物です。ロータリー米山記念奨学会では、2005年11月から2006年6月にかけて、「ロータリーの友」誌“よねやまだより”のページにて『ロータリー米山記念奨学事業の宝物』と題するシリーズを展開。18人の米山学友の「日本留学を志した経緯」や「ロータリーとの出会い」「将来の夢」を取り上げました。

ここでは、その中から、特に読者に感銘を与えた3人の米山学友の話をご紹介します。



言葉の力が未来を開く

—— 元駐日韓国大使からのメッセージ ——

ロータリー米山記念奨学会は、これまで1万人以上の学友（元奨学生）を世界に送り出しています。その中で最も顕著な活躍をしている学友の一人が、崔相龍元駐日韓国大使です。日韓国交正常化とともに来日、知日派として歩んだ40年。大使在任中は、歴史教科書問題に奔走する苦しい日々でした。しかし、「講演外交」と評されるほど日本語で講演を行い、文化交流に重点をおいた政策を推進するなど、新しい両国の関係を築き上げました。今も、日韓の懸け橋として活躍しています。



高麗大学政治外交学科教授
元駐日大韓民国大使

チェ サンヨン
崔 相龍 さん

- ・ 出身国：韓国
- ・ 奨学期間：1969-72年
- ・ 奨学期間中の学校名：東京大学大学院
- ・ 世話クラブ：東京日本橋RC
東京城西RC

1965年11月、日韓国交正常化からわずか数か月後、韓国から日本へ渡った22歳の若者がいました。両国間の往来は年間1万人にすぎなかった時代。母は毎朝5時に起きてお経をあげ、日本で学ぶ息子の無事を祈り続けました。その若者こそ、のちに駐日大使となる崔相龍さんでした。

冷戦の犠牲者として

1942年生まれ。物心ついたころには朝鮮半島が分断され、アメリカの占領下にありました。その後も内戦、共産党と警察の抗争が続き、村は流血事件が絶えませんでした。同じ民族がなぜこんなふうになるのか。引き裂かれるような悲鳴や銃声に耳をふさぎながら、必死に平和を願い続けました。大学時代には、民主政治を求める学生デモ（四・一九革命）に加わり、投獄された経験もあります。

ソウル大学を卒業後、祖国が分断された原因やアメリカによる占領政治を研究し、平和を取り戻すための実践的方法を探るために、日本への留学を決意します。韓国の政治学者の8割以上がアメリカ留学を選ぶ中、より客観的な視点で研究することができるの判断でした。来日後、東京大学大学院修士課程へ入学。博士課程へ進み、米山奨学生となります。ロータリー米山記念奨学会が財団法人となって2年、まだカウンセラー制度も整備されていない時代でしたが、世話クラブである東京日本橋ロータリークラブ(RC)では多彩な内容の卓話に耳を傾け、

東京城西RCでは温かな家庭的雰囲気の中で人間関係を深めました。そして1972年、法学博士の学位を取得。東大の国際政治学分野では日本人も含め初の博士号という、優れた学績を残しました。

帰国後は韓国の中央大学助教授、ハーバード大学客員教授、高麗大学教授、同大亜細亜問題研究所所長ほか、韓国政治学会会長、韓国平和学会会長など、数々の要職を歴任。その中でも真骨頂を發揮したのが外交通商部の諮問委員、そして、駐日大使としての活躍です。

文化交流が争点を克服する

1998年、金大中前大統領と故小渕恵三元総理大臣との間で「日韓共同宣言」が交わされました。21世紀に向けて両国の新しいパートナーシップを構築する内容です。諮問委員としてこの宣言文書の作成に参画し、大統領とともに来日していた崔さんは、両国のリーダーが署名する姿を目に焼きつけるように見つめていました。そして同年、金大中前大統領は、国内の猛反対を押し切り、半世紀にわたって禁止



総理官邸で小泉純一郎総理(当時)と会談

されてきた日本の大衆文化の開放措置に踏み切りました。この大きな決断に至った背景にも、崔さんの粘り強い説得があったのです。

「“文化”は、たった10年足らずで韓流ブームを生み出すような、ものすごいパワーを秘めています。どの国にも、別の国の文化を学び、あるいは逆に影響を与えた歴史があるでしょう。文化とは、優劣をつけるものではなく、長い歴史の中で行ったり来たりしながら学び合うプロセスです。そして、交流の蓄積こそが、歴史的な争点を克服する力となるのです」

サッカーの2002年FIFAワールドカップは、日韓共同で開催するという、両国の歴史に残る文化共同事業でした。この事業の成功が「日韓共同宣言の総決算」と考えた崔さんは、関連行事の開催などに尽力。2005年には、国交正常化40周年を記念し、700件以上もの交流事業が実施された「日韓友情年」の韓国側諮問委員長としても奔走しました。

「その間、竹島問題や靖国神社参拝など、政府間の関係は必ずしも良いとはいえませんでした。けれども、今では1日に1万人もの人々が両国間を往来しています。時に関係が後退したかのように見えても、民間レベルでは確実に前進しているのです」

人間は、話し合って前進する

金大中前大統領の厚い信頼を得た崔さんは2000年、駐日韓国大使に抜擢されます。大学教授から大使、特に駐日大使という重要なポストへ任命された例はありませんでした。政治経験のない崔さんにあるのはただ一つ、これまでに育んできた日本人との友情です。2002年までの700日余にのぼる在任中、最も大きな問題は歴史教科書問題でした。韓国と日本、双方の立場がわかるだけに、板挟みの苦痛も味わいました。それでも、130回以上もの講演を日本語で行い、文化や社会通念を比較しながら、両国の理解を深めるために語り続けました。そして、議論

の対象となった教科書の採択率が0.039%にとどまったことは、「人間は、話し合うことによって前進することができる」という確信へつながったのです。

“言葉のチカラを信じている”——。日本滞在中、テレビから流れてきたCMに、思わず振り向きました。これまで崔さんは、いかなる講演でも原稿を読み上げたことはありません。なぜなら、言葉には“力”があると信じているからです。読むだけの言葉には訴える力がない。生きた言葉には魂が宿っている。崔さんは、そのことを信念にしてきました。

未来をあきらめてはならない

両国の間に、依然として立ちはだかる壁。「歴史は、砂の上に書いた文字ではありません。事実を消し去ることはできませんが、その解釈の多様性は知的寛容をもって認め合わねばなりません。むしろ、違う部分を理解し合うことにこそ、真の友情が芽生えるものです。韓国と日本は、資本主義経済と民主主義を共有し、東洋と西洋の教養を併せ持つ、世界に類をみない国同士です。過去を忘れてはいけませんが、過去にとらわれて未来をあきらめてはいけません」。

9歳になる孫娘の写真を、肌身離さず持ち歩いている崔さん。「将来、この子を日本に留学させたいと思っています。多様な世界観を身につけ、客観的に見る力を養ってほしいから」。今、日本にいる留学生はまさに“無名なる外交官”です。留学生、あるいは市民レベルでの交流がますます拡大し、真の意味での友好関係を築いてほしい、それが、崔さんの夢です。

本稿は、『ロータリーの友』2007年2月号に掲載されたものです。

生徒たちがつなぐ夢の続き

—— モンゴル初の3年制高校を創設 ——

セーラー服や学生服姿の生徒たち、お昼休みにはみんなで給食を食べ、放課後は部活動やサークル活動に汗を流す。そんな日本のごく普通の学校風景が、モンゴルの首都ウランバートル市の新モンゴル高校でも見られます。この学校は、米山学友のジャンチブ・ガルバドラッハさんが、主に山形県と宮城県の人たちからの支援を得て設立したモンゴル初の3年制高校。その卒業生たちは日本をはじめ世界の大学へと進学し、将来のモンゴルを支える大きな力になろうとしています。



新モンゴル高校 校長

ジャンチブ・
ガルバドラッハ さん

- ・ 出身国：モンゴル
- ・ 奨学期間：1998-99 年
- ・ 奨学期間中の学校名：山形大学大学院
- ・ 世話クラブ：山形北RC

「モンゴルに国際標準の3年制の高校をつくりたい」

日本に留学して3年目、ちょうど米山奨学生になったころ、ジャンチブさんに“人生の夢”が芽生えました。当時のモンゴルの教育課程は、小・中・高が4・4・2の合計10年間。先進国の標準と比べて2年短く、高校を卒業しても海外の大学では入学資格を得られません。母国の発展のために、モンゴル

の2年間の高校課程を国際標準の3年間に移した高校をつくり、海外の大学に進学し、国際的に貢献できる人材を育成したい、というジャンチブさんの夢は、やがて周囲の日本人を動かし、モンゴルの地で実現することになったのです。

日本の教育に学ぶ

ウランバートルの中学校の物理教師で、教頭まで務めていたジャンチブさんは、1992年以降の民主化に伴い、世界の国々から製品や情報が入ってくるようになると、日本の発展ぶりと技術力の高さに驚きました。「これは、教育や人材育成が優れているからだ」。そう確信した彼は、日本の教育の秘密を知り、その中からモンゴルに役立つことを取り入れたいと、日本留学を決意しました。

難関を勝ち抜き、日本政府が奨学金を支給する教員研修留学生に選ばれて、1995年秋に来日。半年間の日本語研修を終えると、妻と4人の娘たちを呼び寄せ、山形での留学生生活をスタートさせました。生活が苦しくなるのは覚悟の上でしたが、子どもたちに

とって、日本語を習得し、先進国の社会を肌で感じることは、将来の大きな財産になるだろうと信じての決断でした。

子どもたちを地元の学校に入れると、ジャンチブさんも足しげく通い、授業を参観したり、PTA活動に参加したりして、さまざまな角度から教育現場を観察しました。大学の授業だけでは学べない、これらの生きた経験が、具体的な高校設立構想の大きな糧となりました。

広がる支援の輪

ロータリーと出会ったのは、山形大学大学院修士課程1年のときでした。山形北ロータリークラブ(RC)が地域の留学生を招いた交流会に参加した際、酒巻満会員と知り合い、交流が始まったのです。

当時、国費の奨学期間はすでに終了、私費留学生となっていたジャンチブさんは、一家6人の生活を支えるため、勉学の傍ら、妻と必死でアルバイトをする毎日でした。酒巻会員から米山奨学金のことを聞いたジャンチブさんは、翌年申し込んで見事合格。米山奨学生として生活の安定を得るとともに、カウンセラーとなった酒巻会員ははじめ世

話クラブの山形北RCとの交流を深めました。

「実直」「誠実」「会う人みんなに信頼され、とにかくファンが多い」と、ジャンチブさんを語る人は口をそろえます。酒巻会員はそれに加えて、「自分のビジョンをしっかりともち、やると言ったらやり通す、しんの強さがあった」と評しました。

母国に理想の高校をつくりたいというジャンチブさんの夢を知った酒巻会員たちは、「私たちが柱一本でも立ててやるか」と支援の会を結成。こうしてできた「柱一本の会」は、山形北RCを中心に、山形県や宮城県の多くの一般の人も会員となって募金に協力し、NHKや新聞社にもその活動が大きく取り上げられました。そして、支援の輪は、遠く関西や中国地方にまで広がったのです。

「ロータリーの枠を超え、募金活動が広まった珍しいケース。それだけに、寄付を募るわれわれの責任は大きく、支援に当たっては認可や費用の計画を詳しく聞き、実現性を十分に検証してから踏み切った」と経緯を語ったのは、「柱一本の会」会長を務めた第2800地区(山形県)の高橋文夫パストガバナー。「柱一本の会」と第2800地区の集めた寄付金は、3年間で1,000万円以上。しかし、寄付だけでは目標額に届かなかったため、不足分は「出資者を募ることで集めた」と言います。

募金活動のほか、日本の学校で不用になった机やイス、パソコンなどの備品や制服、学校の教材などをコンテナに詰めてモンゴルに送るなど、その支援は多岐にわたりました。

卒業生に願いを託して

こうして、日本からの多くの善意が実を結び、2000年10月、ウランバートル



2006年6月に卒業した3年生たちと

市内に「新モンゴル高校」が開校。モンゴル初の3年制高校への関心は高く、翌年には当時のバガバンディ大統領も視察に訪れました。

校舎は3階建てで、コンピューター室や視聴覚室も完備。体育館やセミナーハウスも建設されて、年ごとに学習環境が整えられています。カリキュラムや学習指導方法は、日本のモデルを採用。もちろん、日本語の選択授業もあります。ジャンチブさんが日本の教育現場を見てぜひ取り入れたいと考えた、給食・制服・部活動なども当初から導入され、生徒たちから好評を得ています。

全校生徒数は約300人。小規模ながら、モンゴルでも指折りの進学校として、日本や海外の大学への留学を希望する優秀な生徒が数多く入学してきます。これまでに33人の卒業生が日本留学を果たしたほか、アメリカやロシア、中国、韓国、トルコなどに留学する生徒も出てきました。今年、東京大学法学部に入学した生徒や、アメリカの名門、マサチューセッツ工科大学に4年間の奨学金つきで合格した生徒まで出て、ジャンチブさんや日本の支援

者の喜びもひとしおです。

生徒たちから「ガラー先生」と慕われるジャンチブさんの校長室には、毎日、報告や相談に訪れる生徒や卒業生が後を絶ちません。校長として経営の苦労はありますが、彼らの生き生きとした姿を見るのが何よりの喜びと語るジャンチブさん。これからの夢は?

「国に直接声を届けたり、有志の方々と協力し合ったりして、教育改革への取り組みを広げていきたいですね。日本のロータリーの皆さまには、心から感謝しています。その恩に報いるためにも、卒業生たちを通じて、もっと日本とモンゴルの友好関係に力を入れていければと願っています。日本はモンゴルをはじめ多くの発展途上国を支援してくれていますが、われわれモンゴル人も自分なりの力を加えていきたい。それには教え子たちの力が必要です。それを求めていくのが、これからの私の夢です」

本稿は、『ロータリーの友』2006年12月号に掲載されたものであり、文中の進学実績などはすべて2006年当時のものです。

Bangladesh の未来を支えて

—— ロータリーの水プロジェクトとともに ——

Bangladesh は、政治不安や人口増加をはじめ、多くの問題を抱えています。なかでも地下水のヒ素汚染は深刻です。国民の多くが利用する井戸水に地中のヒ素が溶け出し、少なくとも 1 万 5,000 人以上が慢性ヒ素中毒に苦しんでいます。2007 年 3 月に博士号を取得したシャリフ・ウディンさんは、国際ロータリー第 2670 地区（愛媛・香川・徳島・高知）の一大事業となった、ろ過装置付き管井戸 100 基を Bangladesh の 19 村へ提供する水プロジェクトに協力。ロータリアンの心に多くの記憶を刻んで母国へと旅立ちました。



ジャハングルノギル大学 助教授

モハマド・ シャリフ・ウディン さん

- ・ 出身国： Bangladesh
- ・ 奨学期間：2006-07 年
- ・ 奨学期間中の学校名：徳島大学大学院
- ・ 世話クラブ：徳島南 RC

首都ダッカから西へ 200km。川を越え、ジャングルを切り開いてつくられた小さな村が、シャリフさんの生まれ育ったクーシャットプル村です。少年時代、読みたい本さえ手に入らず、「夢も希望もなかった」というシャリフさん。そんな彼に父親は「何事にも誠実に、一生懸命に努力しなさい。いつか必ず報われるときが来るのだから」と、希望を与え続けました。

やがて大学を卒業し、大学院の修士課程へ進学。ところが、政情不安のために卒業試験が 3 年半も延期されるという事態が生じます。勉強に集中できる環境で、情報科学の高度な知識を身につけたい。いつか教科書で習った日本に行けたら——。抱いていたあこがれが現実のものとなりました。日本の大学へ打診し、いち早く返事があった徳島大学へ、半年間の学費援助付き客員研究員として留学することが決まったのです。村中の期待を背負っての旅立ちでした。

自分たちの力で母国を変えたい

日本に来て驚いたのは、人々の暮らしが安全であること。「どうすれば日本のような国になれるのだろうか?」。自然と考えるようになりました。

半年間の学費援助が終わり、博士課程へ進学したシャリフさんは、たちまち学費のねん出に頭を抱えます。米山記念奨学金に応募したものの、「あまりにも日本語ができないから」との理由で、1 年目は不合格。奮起したシャリフさんは、翌年ようやく合格通知を手にすることができました。

世話クラブとなった徳島南ロータリークラブ (RC) には、偶然にもシャリフさんと同姓同名で、出身国も同じ米山奨学生が前年度までおり、会員たちは彼から Bangladesh のヒ素汚染について話を聞いていました。今から約 50 年前、西日本を中心に 130 人もの乳児が死亡した「森永ヒ素ミルク中毒事件」。その生産工場があった徳島の人々にとって、ヒ素の問題は他人事ではありません。そして、新しく受け入れた 2 人目のシャリフさんは、卒業後、母国のために働きたいという明確な意思をもっていました。

「私の国では、海外留学組の多くが、より良いチャンスを求めて帰国しません。でも私は、自分が国のために働く義務を負った一人だと思っています。日本でも昔、海外に留学した人々が勉強を終えると帰国し、日本の発展のために尽くしたと聞きました。われわれも、自分たちの力で生まれ変わることができる、そう信じています」

地区をあげての水プロジェクトが始動

シャリフさんの志に感銘を受けた徳島南 RC では、彼の故郷クーシャットプ

ル村に、ろ過装置付き管井戸10基の寄贈を決めました。さらに、昨年4月の地区協議会で、同クラブ社会奉仕委員会委員長、森本奈津子氏とシャリフさんが壇上に立ち、より広い支援を呼びかけたところ、賛同者が次々と現れました。同地区の飯忠悟ガバナーも、悲しみをたたえたシャリフさんの目を見るや、「1クラブのプロジェクトでは結果

が小さい」と、地区のWCS(世界社会奉仕)活動として取り上げることを決断。2006-07年度国際ロータリーの強調事項の一つが“水保全”であったことも、追い風となりました。こうして、100基の管井戸を寄贈する一大事業が始まったのです。

一番の問題は、現地でこの事業を推進してくれるコーディネーターを探すことでした。博士号取得に向けて最後の論文に着手していたシャリフさんは、自分の代わりに骨を折ってくれる適任者探しに頭を痛めた末、ジャハングルノギル大学のラーマン助教授に依頼することに決めました。ラーマン氏はその信頼に応え、管井戸1基あたりの費用を抑える提案や、余った資金で管井戸を追加購入するなど、ロータリアンの意をくみ取った活躍をしてくれました。

当初は、資金だけを送る予定でしたが、なんとか現地へ行ってほしいと、シャリフさんは主張。「直接日本人と話すことによって、村人の意識が変わるはずだと思いました。努力することで、



日本からの訪問客を取り囲む子どもたち(クーシャットプル村で)

自分たちの人生を変えることができる。そのための勇気をもらえるはずだ」と。

飯ガバナーも「皆さんからお預かりした資金を使う以上、この目で見届けねば」と、多忙なガバナー公式訪問の合間を縫っての同行を決めました。

そして昨年9月16日から4日間、掘削現場の視察と贈呈式のために、新聞記者を含む9人が現地を訪問。生まれて初めて外国人を迎えた村人たちは、総出で一行を歓待しました。出来上がったばかりの管井戸から水を飲んだ森本氏は、「これで未来ある子どもたちが苦しなくて済む。どんなに高いツアーよりも忘れられない感動を胸に刻んだ」と目頭を熱くし、「ここから支援の輪が全国に広がってほしい」と語りました。同行した、シャリフさんの米山カウンセラー阿部榮次氏も、「シャリフ君の面倒を見ることで、知らず知らずに国際奉仕をしている自分がいました。まして、バングラデシュへ管井戸を贈るプロジェクトが実現し、夢のようです」と、充実感をみなぎらせました。

今の私には夢がある

「人は、人のために存在する。それが、ロータリアンの皆さんから学んだこと。私たちは知識を分かち合い、より良い社会をつくり上げるために助け合わねばなりません」。帰国を前にこう語ったシャリフさん。そんな彼の夢は?

「今の私には、夢があります。子どもたちのころ、“教育は国の根幹”と教わりましたが、本当の意味を理解していませんでした。日本に来て初めてわかったのです。教育なしには自分たちの置かれた状況を変えることはできないのだと。故郷の村では75%の人が教育を受けていません。私は母国に帰り、大学の助教授として教鞭をとりませんが、同時に、この4月から友人とお金を出し合い、貧しくて学校に行くことのできない子どもや成人のための識字教育をスタートさせるつもりです」

本稿は、『ロータリーの友』2007年4月号に掲載されたものであり、文中の役職などはすべて当時のものです。

4 世話クラブ・カウンセラー制度があればこそ

世話クラブ・カウンセラー制度のもと、米山奨学生は毎月1回ロータリークラブの例会に通い、クラブの行事に参加するなどして、ロータリアンとの交流を図ります。奨学生にとっては、大学生活だけでは味わえない地域の日本人との交流の機会であるとともに、ロータリアンにとっても、草の根の民間交流の絶好のチャンスでもあります。

人を知り、文化を知り、お互いへの関心を深めて“小さな平和”の創造を実践していく——世話クラブ・カウンセラー制度こそ、世界に平和の種をまく米山奨学事業の神髄なのです。

元米山奨学生からすばらしい贈り物

富士宮西ロータリークラブ 久保 智彦

元米山奨学生が当クラブ会員のお寺で結婚式を挙げました。その後、古式ゆかしい韓国の風習も披露。その様子は地元の各新聞で紹介され、地域の私費留学生へ「ロータリー米山記念奨学会」の事業を広く知らしめ、ロータリーの広報に貢献しました。

当時カウンセラーを務めた山口裕嗣シンユンジョン会員から「辛允正が結婚するよ。私のお寺で式を挙げたい」との話を聞き、大変驚きました。彼女が「お寺で式を挙げる」ことについてです。今の日本ですら「結婚式はキリスト教」というのが一般的。それを西山本門寺塔頭浄円坊で行うのは、辛允正が山口会員を「日本のお父さん」と呼んでいたこともあったからなのでしょう。彼女は「日本のお父さんの前で結婚の誓いのことばを言いたい」とか。

日取りも決まり、韓国から新郎新婦の両親も駆けつけ、2005年2月26日に挙式となりました。その後、新郎のオセウク呉世旭を招き、3月11日の例会で古式ゆかしく韓国式の結婚式、両親への感謝と子孫繁栄を望む儀式「ペペの儀式」を披露し、当クラブ会員も祝福しました。

辛允正は1998年来日。日本語学校通学後、静岡大学大学院修士課程で教育心理学を専攻中の2001年4月～2003年3月、当クラブでお世話しました。修了後は日本で就職、その間に静岡市内で出会った韓国人青年と結婚を決めたとか。

私たち会員は辛允正を世話したことがきっかけで、米山奨学事業のすばらしさを体験しました。カウンセラーだった山口会員は、卒業後も親身になって対応するなど、大変な苦勞もあったでしょうが、私たち会員に“奉仕の喜び”、すなわち“お世話したことの苦勞と喜び”を事あるごとに伝え、さらにそれを共有させてくれました。

辛允正のお父さんが山口会員に対して「娘を取られたような気がする」と言ったとか。それもそのはず。結婚のことは、韓国の“実”のお父さんではなく、山口会員に相談したそうです。山口会員への信頼は、辛允正の言葉「日本のお父さんの前で誓いの詞を述べたい」が物語っていると思います。親身になってカウンセラーの務めを全うした山口会員の“苦勞と喜び”の結果でしょう。

当クラブ会員は、辛允正への山口会員の献身的な“超我の奉仕”を通して、本当に良い贈り物ももらいました。米山奨学事業は、私たちロータリアンが「ロータリーの神髄」に触れることができるよい制度と思います。

本当に辛允正ありがとう。また、カウンセラーを引き受けた山口さん。本当にありがとうございました。



中国語勉強会の楽しみ

川崎ロータリークラブ 高柳 馨

かつて「近くて遠い国」と言われた中国は、靖国問題でぎくしゃくしながらも、経済や人間の交流を通じて「近くて近い」国になりました。最近、中国語を学ぶ人が非常に増えているようですが、当クラブでも、向学心あふれる会員が、復旦大学出身で、横浜市立大学大学院国際文化研究科博士課程在学中の米山奨学生・朱憶天^{シュエ}さんから、月1回、北京語を学んでおります。



当初は会員4人で始めた勉強会ですが、1年10か月たった現在は、クラブ外の人も含めて7~8人参加するようになり、私も毎回の勉強会を楽しみにしております。

朱老師(老師は中国語で先生の意味)は、北京語はもとより日中の歴史、文化にも精通しており、毎回約2時間の勉強会は語学だけではなく、中国の文化を通じて日本の文化を再認識するという、深い内容となっています。その後の懇親会では、中国酒、中国料理を楽しみながら、日中をめぐるさまざまな話題に花を咲かせております。

参加者が中国語を学ぶ動機は、ビジネスや交流のため、中国語の歌を歌うためなどさまざまですが、毎回の盛り上がりを見ますと、皆さん大変、満足をしているように思います。テキストはNHKの中国語講座テキストを使い、私もわからないところを毎回質問しますが、朱老師の解説は明快で、すばらしい老師に出会ったことを感謝しております。

朱老師が将来大成されることを念願し、毎回わずかにお支払いしている授業料が、少しでもお役に立てばと思っております。

米山奨学生になった私

ダン・アン・ヴェー

(ベトナム/2004~06/明治大学/川崎稲生RC)

米山奨学生になり、あっという間に、1年半になりました。ゲストとして、初めて例会に出たときの不安な気持ちを今でもはっきり覚えています。例会は私が通っていた日本語学校やアルバイト先とは違い、周りは普段のような若者の友達ばかりではないので、どんな会話をすれば良いか、とても悩みました。失礼がないように常に気をつけようと思いました。そして、不安を抱えたまま、例会に出ました。しかし、その不安はすぐに消えました。とても温かい歓迎を受け、ロータリアンの皆さまに親切に声をかけられ、本当に嬉しかった。例会が始まって、初めてロータリーソングを歌いました。四つのテストでした。「真実かどうか」、「みんなに公平か」、「好意と友情を深めるか」、「みんなのためになるかどうか」。とても短い歌でしたが、言葉一つ一つ深い意味を持ち、うたいながら、知らずに胸が熱くなりました。



私は今、米山奨学生になり、とても幸せだと思っています。なぜなら、経済的な支援を受けるだけでなく、それよりもっと大切な、形のない温かいものを受けているからです。日本に来たばかりの頃、留学生である私は一人暮らしで、親はいない、家族もいない、頼れる人もいませんでした。毎日学校が終わったら急いでアルバイト先に向かって走りながら、5分で食事を済ませるのが当たり前のような生活を送っていました。しかし、今は全然違います。時間は少し余裕が出て、勉強に十分に集中できています。そして、毎週、例会に行くとき、米山奨学生のバッジを胸につけると、実家に帰る息子のような気持ちになります。皆さんは悩みや相談をなんでも聞いてくれます。ぜいたくな夢のように温かい食卓で、学校の話や将来への期待や不安についていろいろ話せることは、私にとって何より幸せです。こんなに温かい応援をいただいた私は、少しでも期待に応えられるように日々努力しています。

2006年、皆さまのおかげで、念願だった日本での就職が決まりました。母国と日本の懸け橋になるのは以前から私の大きな夢です。少し見えてきたその夢に向かって、日本で社会人として、来年からもっと努力していかなければならないと思います。この2年間の大変な温かい思い出を背負って、心強く歩んでいきたいと思っています。

米山学友会の紹介

米山学友会は、学友と現役奨学生によって組織される米山奨学生の同窓会組織です。現在、日本国内に26、海外に2(韓国・台湾)の計28の米山学友会があります。

学友会によって活動内容は異なりますが、地区米山奨学委員会やロータリアンと連携して、交流を深めるさまざまなイベントを企画し、活動しています。

地域で、海外で、広がる異文化交流の輪

韓国米山学友会

韓国米山学友会では、2006年12月26日～29日に行われた第2780地区(神奈川県)のインターアクト韓国研修旅行の企画に協力し、研修旅行に参加した26人の日本の高校生を前に、韓国学友会の安 熙道(アン ヒドウ)会長ほか2名の会員が卓話を行いました。日本留学の経験を糧に、それぞれ大学や国の研究機関の第一線で活躍している学友とあって、高校生たちの将来への希望に刺激を与えたようです。安会長は、「今回の行事が、今後の韓日両国の親善交流に寄与することを祈っています」と、喜びのコメントを寄せてくれました。



第2560地区(新潟県)米山学友会

第2560地区(新潟)の米山学友会は2006年2月、中越地震・雪害等の被災者に「足湯」と「水餃子」を提供するボランティア活動を実施しました。当日は、学友・奨学生のほか、地元の学生も含め総勢40人ほどのボランティアが会場に集合。参加者は皆生き生きとした表情で水餃子を作り、葉草を煮出して被災者を迎えました。同学友会の詹 秀娟会長は、「今後も、各地の被災者の力になるような学友会活動をしていきたい」と意気込みを見せました。



第2570地区(埼玉県西北部)米山学友会

第2570地区(埼玉県西北部)米山学友会では、毎年8月14日の秩父音頭まつりに参加し、奨学生やロータリアンと一緒に、浴衣を着て踊るのが恒例の行事となっています。2006年の秩父音頭まつりでは、正調秩父音頭の家元であり、同地区米山理事の金子千侍氏による講習会を経て、なんとか踊れるようになった奨学生・学友らが、緊張しながらも3回にわたる演技を披露。見事「特別賞」に輝くとともに、地元の人たちとの話の輪も広がり、素晴らしい交流できました。



躍進する米山学友会

台湾米山学友会（（社）中華民国扶輪米山会）の阮允恭理事長に聞きました

— 活動も盛んで台湾で社団法人にまでなっている台湾学友会ですが、現在の会の規模を教えてください。

阮 台湾国内で、台北・新竹・台中・高雄の4つの支部に分かれています。会員総数は280人くらいです。40年前に留学した人から、つい最近帰国した人まで、年齢構成も幅広いのが特徴です。

— 主にどのような活動をしていますか？

阮 毎月1回会合を開いています。ロータリークラブの例会と同じように、卓話の時間もあります。毎年12月には年次総会を開いて、新入会員の顔合せと入会式を行います。そのほか、会員の親睦を深めるための小旅行もたびたび実施しています。2006年9月には、日本留学の魅力台湾の若者に再認識してもらおうと、台北でシン

ポジウムを開催しました。これには、台湾の学生や社会人150人以上が参加し、日本からも100人を超えるロータリアンの方々が応援に駆けつけてくれました。今後もこのような社会的に意義のある活動に取り組んでいきたいと思います。

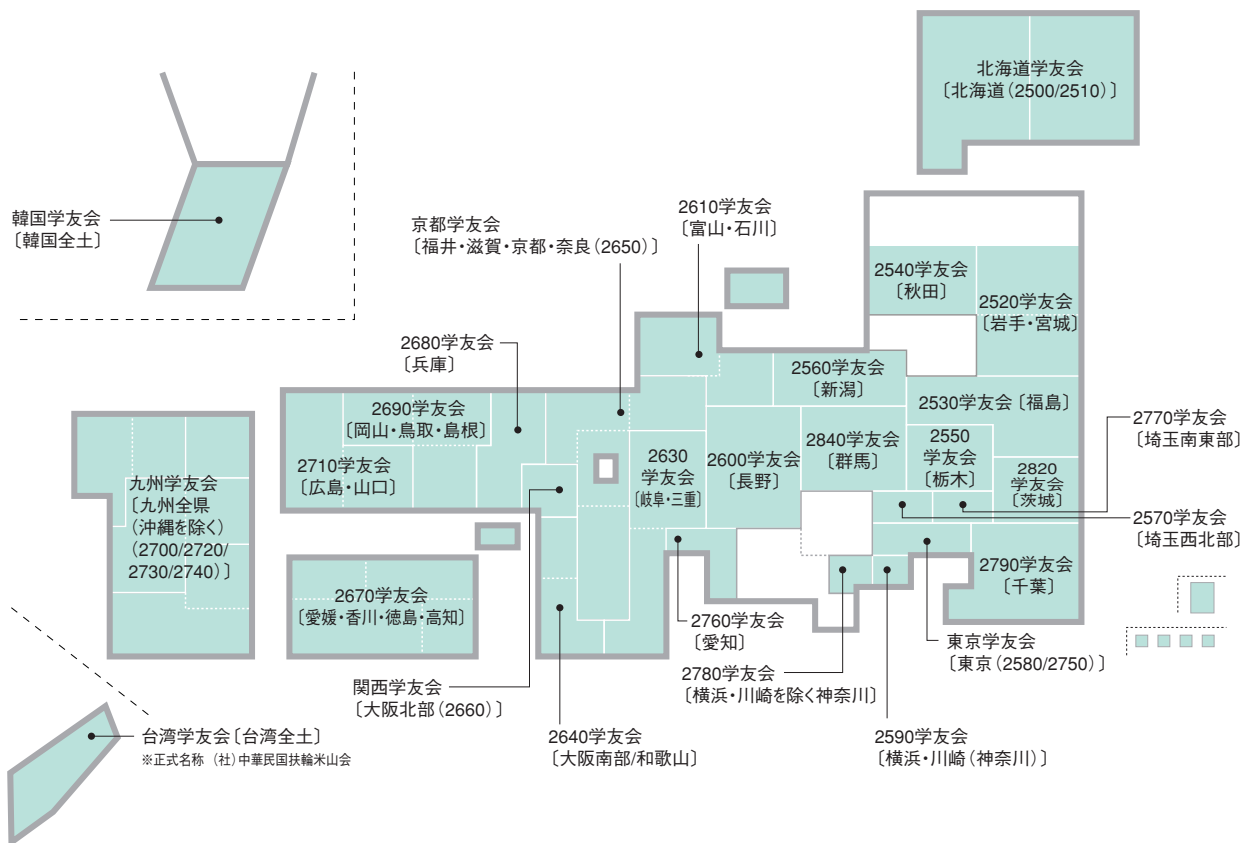
— 阮理事長にとって、日本に留学したこと、またその中で米山奨学金を受けたことは、それぞれどのように意味のあることでしたか？

阮 日本留学は、私を成長させてくれた環境であり、そこで得たものはその後の人生の支えになりました。しかし、あのとき、米山奨学生にならなければ、留学の意味はかなり違っていたと思います。今でも世話クラブだった神戸RCの例会を訪問すると、3歳のときの気持ちになります。米山の学友に共通するのは“感謝の気持ち”。これから3年間、私はまとめ役として学友会の活動を盛り上げ、次の若い世代にバトンタッチすることが最大の責務ですが、この“感謝の気持ち”も次の世代に引き継いで、末永く扶輪米山会を続けていけるようにしたいと願っています。



(社) 中華民国扶輪米山会理事長
阮 允恭 さん
(台湾/1971-74/神戸大学大学院
/神戸RC)

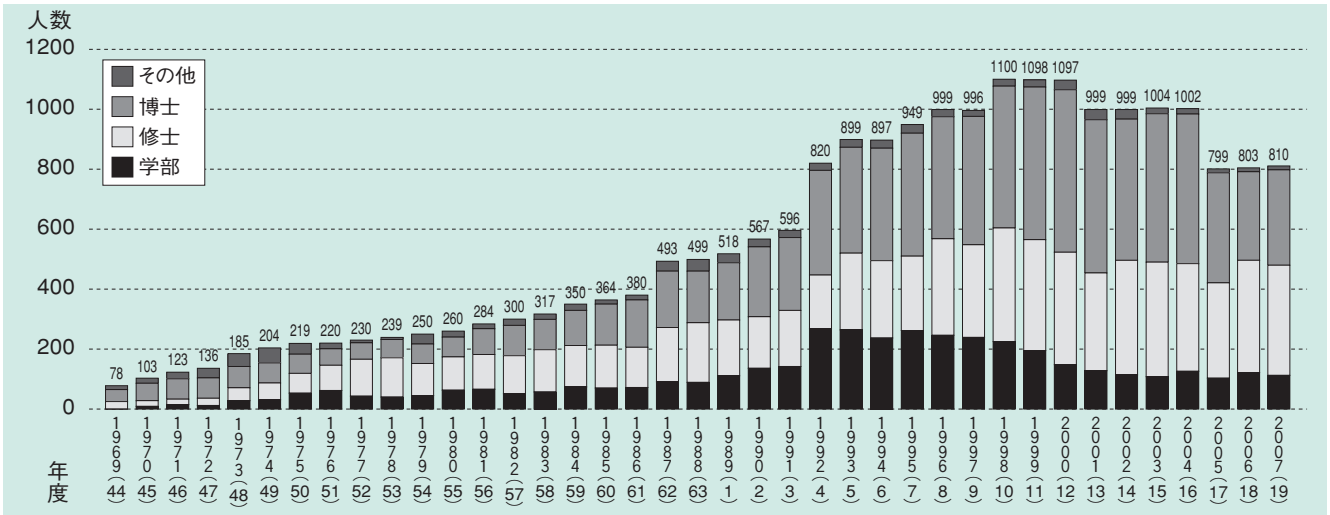
米山学友会一覽



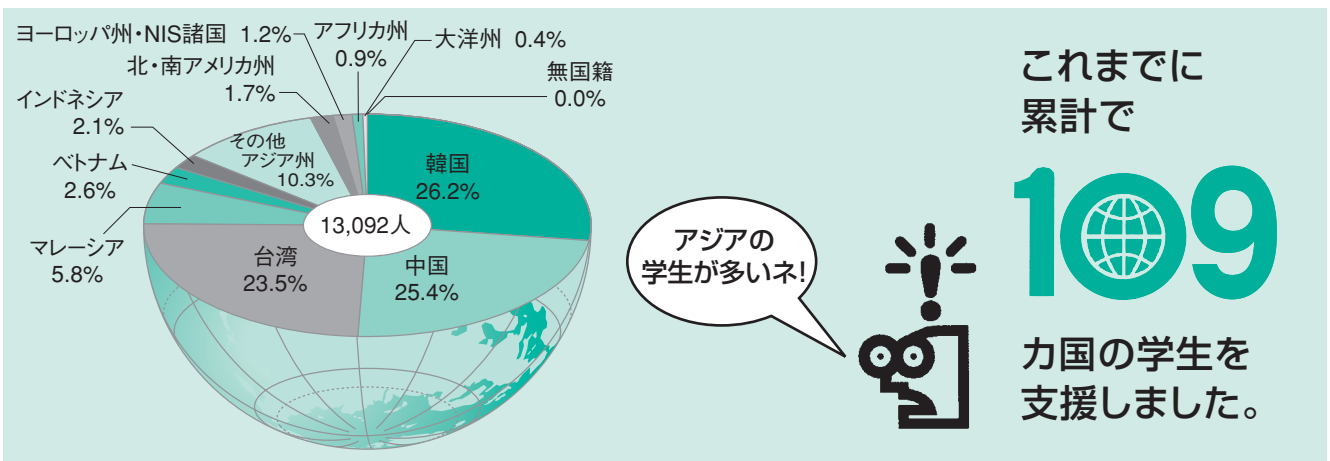
データで見る米山学友

2007年3月末までに終了した学友13,092人の統計です

1. 米山奨学生数の推移



2. 学友の国籍



3. 世界で活躍する学友



学友なんでも



資料館

Q1 出身大学BEST10は？

1	東京大学	842人
2	筑波大学	531人
3	大阪大学	412人
4	東北大学	337人
5	九州大学	286人
6	名古屋大学	280人
7	京都大学	279人
8	神戸大学	270人
9	千葉大学	266人
10	信州大学	263人

Q2 博士号取得者数は？(申請ベース)

A 2988人 / 11,908人中
(国外取得者や渡日前取得者を含む)

【博士号取得者の出身国ランキング】

1	韓国	1190人
2	中国	970人
3	台湾	568人
4	バングラデシュ	60人
5	インドネシア/ベトナム	23人

韓国・中国は
大学院生のみ
対象のため、
多くなっています。

【博士号の種類】(米山奨学会独自の分類です)

1	工学	1007件
2	医学	468件
3	農学	446件
4	理学	288件
5	人文学	184件

Q3 学友の現在の職業は？

(米山奨学会独自の分類です)

1	教育	2880人
2	企業	1984人
3	研究所	367人
4	病院	258人
5	官吏	112人

教育関連の仕事
についている人が
多いんだね。



Q4 ロータリアンになった学友

A 80人 (米山奨学会把握分)

1	台湾	51人
2	韓国	16人
3	ネパール	3人
4	インド	2人
4	バングラデシュ	2人
4	マレーシア	2人
5	スリランカ	1人
5	ベトナム	1人
5	香港	1人
5	中国	1人

学友が作ったロータリークラブ

台湾の台北東海ロータリークラブ(RC)は、1995年に学友が力を合わせて立ち上げた初のクラブです。日本語を公用語とし、日本との親善交流に尽力しています。2007年5月には、米山学友を中心に新しく台中文心RCが誕生しました。

2007年7月1日、 ロータリー米山記念奨学会は 財団設立40周年を迎えました

これまでに支援した外国人留学生
1万4,000人は、世界へとはばたき、
日本との懸け橋として活躍しています。
私たちはこれからもあゆみ続けます。
未来の親善大使を育て、
世界の平和に貢献するために――。



財団法人ロータリー米山記念奨学会

〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-15 黒龍芝公園ビル3F
Tel:03-3434-8681 Fax:03-3578-8281
ホームページ <http://www.rotary-yoneyama.or.jp>



RYS.15T.07-9